# ミュイー・「饒樂水考」を讀む

Jas. Mullie, La rivière Jao-lo. Toung-pao Vol. XXX. No. 1—2(P.182—223)

饒樂水とは、古く後漢書(卷一二〇)鮮卑傳に、春期に於けるこの民族聚會の地として記載されて以來、その後宇文・庫莫奚・契丹等の諸族を一聯とする所謂東胡民族の住地内を流れる大河として、支那人始め他民族間にも廣く知られた水名であるが、それが今日何れの河水に比定さるべきかは、軈がて彼等諸部族の遊牧地域、乃至は本牙の所在を究明確認する上に一の重要なキイを與ふるものなるが故に、從來も之に關しては、英金河說・シラムレン說その他の諸說があつて、今猶幾多論議の餘地を殘してゐる。在來行はれた主なる諸說を揭げてみると、讀史方輿紀要(卷一八、直隸九)——これは何河に該當するとも謂はず、文意又明晰を缺ぐ嫌ひがあれば、遽かに推斷を容されないが、恐らく現在赤峰附近に於て英金河と合流する錫爾哈河(我が陸地測量部の地圖には西路噶河とある)を指したものゝ如く思惟される。

熱河志(卷七〇、水二)——讀史方輿紀要の說を演繹考證して、之を英金河と斷じたのが熱河志にして、爾來、承德府志(卷一七)蒙古遊牧記(卷三)大淸一統志(卷二一承德府の條)等の諸書皆この說に從つてゐる。但し熱河志によれば、大淸一統志原本は饒樂水を以て潢河の別名と見做してゐると。

以上は支那側誌書の說であるが、我が國に在つては、早く白鳥倉吉博士がその著「東胡民族考」(第二回、史學雜誌二一編七四九頁—七六二頁)に於て、史實と言語の上より饒樂水卽ちシラムレン說を唱道されて以來、滿鮮地理歷史研究報告を始め、諸學齊しく之を奉ずるに至つた。

西洋に於てこの問題を直接研究の對象として採り擧げたのは、恐らくこゝに紹介せんとするミュイー師の「饒樂水考」を以て始めとすべきであらう。同師は、カソリックの神父として多年熱河各地に駐在し、その間、舊熱河省及び東蒙古の史蹟踏査に從ひ、その研究成果の一部は、嘗て一九二二年の通報（トンパウ）（Les anciennes villes de l'empire des grands Leao au royaume Mongol de Bārin.）に記載されたことは既に周知の筈である。

さて、同師は先づ後漢書より遼代に至る迄の正史その他の史書中に散見する饒樂水關係の資料を左の八種に分ち――年代順に――之等よりこの水の位置名稱を歸納推斷してゐる。（ミュイー師は我が白鳥博士の所說を聞知せざるものゝ如く、從つて師の駁論の重點は熱河志を宗とする英金河說に注がれてゐる。但しその熱河志も唯、承德府志を通じてのみ窺知したに過ぎないことは、論文の劈頭に揭げられた諸書の中に、この書名の見當らないことよりみても明かである。）

1、後漢書（卷一二〇）鮮卑傳

（前略）以季春月。大會於饒樂水上。（唐、李賢註曰水在今營州北）飲讌畢。然後配合。

然し、單にこの文面のみでは殆んど饒樂水の比定を容されないが故に、師は更に烏桓（丸）の據つた烏丸山及び鮮卑の牙を置いた鮮卑山の所在に言ひ及んで、前者を今の阿嚕科爾沁旗の西北百四十里なる烏遼山に比定する蒙古遊牧記（卷三）大清一統志（卷四〇六之一）の說に左袒し、又烏桓の聖山たる赤山を巴林右旗の東北二百五十支里（紹介者注、二百五支里の誤）卽ちウルヂ（uldzi）河の上源に位する巴顏五藍哈達（バヤンウランハタ）に該當せしめる大清一統志（卷四〇七之五。紹介者注、四七〇卷とあるは誤。蒙古遊牧記卷三をも參照）の考定をも支持して（通報一九二二年、一八七頁―一八八頁）結局烏桓（丸）は阿嚕科爾沁部と巴林部領內に逃遁散居したものと認め、同樣に鮮卑山に就いても蒙古遊牧記（卷一）大清一統志（卷四〇五之一）の說、卽ち「科爾沁右旗西三十里有鮮卑山。土人名蒙格」を執つてゐる。

ミュイー師は本節一八八頁註①に於て三國志魏志（卷三〇）鮮卑傳所引の魏書に見える「常以季春。大會作樂水上。」の作樂水の作を饒樂か或は寧ろ作とより近い音、弱（例へば北魏書の弱落水の如き）の誤として之を簡單に論じ去つてゐるのは――魏志の成立をも知らざるものゝ如く、贊し難い。作・饒の二者は白鳥博士

の所説（東胡民族考史學雜誌二一編七四九頁或は室韋考史學雜誌三〇編二九頁）の如く共に或る同名の異譯と見るべく、特に「作樂」より推して原音の initial は z•s に近い音を有してゐたことを推測せしめる。

2、魏書（卷二）太祖紀

登國三年（西紀三八八年）夏四月。幸東赤城。（龍門の東北、讀史方輿紀要卷一八萬全都指揮使司、龍門守護千戶所、赤城堡參照）五月癸亥。北征庫莫奚。六月。大破之。獲其四部雜蓄十餘萬。渡弱落水。班賞將士各有差。

資治通鑑（卷一〇七）にも、註して「弱落水卽饒樂水。在奚中。」と曰ふ。（紹介者註、師がこれを司馬光の註としてゐるのは胡三省の註の誤解にして以下司馬光註とあるは胡註に訂す）

師はこの道武帝（太祖）北征の路順を前年（登國二年）十月より十二月の三ケ月に亘る北巡の行程より類推して、赤城より獨石口を出で喇嘛廟（多倫諾爾？）に至り、次いで、興安嶺の東側溪谷（バレー）を下つて北行したものと考へ、更に資治通鑑（卷一〇七）太元十三年六月の條に見える「魏王珪（道武帝）破庫莫奚於弱落水南。」の記事（紹介者註、北魏書卷一〇〇庫莫奚傳にも弱洛水南とあり、こゝでは洛に作る）より、この水は東（或は西）流するものにして、例へば老哈河の如く、東北（或は西南）流するものと見るは妥當を缺ぐと謂ひ、猶又この水名に言及して、弱落の二字も饒樂と同じく漢名にあらずして北狄名の音譯であらうと謂ふ。

3、資治通鑑（卷一一〇）

降安二年（西紀三九八年）春正月。燕王寶（慕容寶）襲庫莫奚。（中略）己未北行。庚申。渡澆洛水。（胡註曰澆洛水卽饒樂水也。賢曰水在今營州北。）

この澆洛水は、前引第二の魏書太祖紀より考へて疑ひもなく饒樂水（師はかく謂ふも嚴密には弱落水でなければならぬ）に外ならぬ。されど澆は niau なれば音韻上からは澆洛を饒樂と見る胡註の說には與みし難いものがある。或は澆は饒の誤とは見られないであらうかと。

師はこゝで龍城（和龍＝朝陽）澆洛水間の距離に就いては何等言及する所はないが、前引資治通鑑の文面に、己未北行して翌、庚申、澆洛水を濟るとあれば（太平御覽には收めてゐないが、現行本十六國春秋卷四六後燕錄にも同文あり。）兩者の間は僅か一日程に過ぎないことを知る。此事は兩者間の距離を窺ふ上に一の傍證を與ふるものである。因みに熱河志（卷七〇）所引の十六

國春秋後燕錄に「慕容寶襲庫莫奚。己未北行。甲申渡澆洛水。距龍城一日程。」とて庚申を甲申としてゐるのは誤にして、白鳥博士がこの點に氣付かず、熱河志の甲申をその儘に援用して己未との日差を二十六日となし、之を以て龍城・澆洛水間の距離に相當するものと考定して、其爲「一日程」をわざ〳〵一月程の誤寫とされてゐる（東胡民族考第二回史學雜誌二一編七五五頁）のは從ふべきでない。

4、資治通鑑（卷九三）

大寧三年（西紀三二五年）二月。後趙王（石）勒加宇文乞得歸官爵。使之擊慕容廆。廆遣世子皝・索頭段國共擊之。（中略）乞得歸據澆水（胡註曰澆水即澆洛水也）以拒皝。

魏書（卷一〇三）宇文莫槐傳。

惠帝三年（宇文）乞得龜屯保澆水。固壘不戰。云云。

5、魏書（卷一〇〇或は北史卷九四）勿吉國傳。

A、自和龍。北二百餘里有善玉山。山北行十三日至祁黎山。又北行七日至如洛瓌水。水廣里餘。又北行十五日至太魯水（北史太岳魯水）。又東北行十八日到其國。云云。

B、初發其國（勿吉國）。乘船泝難河。西上至太沙河沉船於水。南出陸行。渡洛孤水。從契丹界達和龍。

A・B中に見える難河は唐書以下の史書に那河（兩唐書）惱木連・納兀河・猱河・那江（元史）納語江・腦溫江（元朝祕史）（紹介者註遼史納水）等と記されるものと同一水にして、今の嫩江を謂ひ、太魯水、太沙河は它漏・他漏（唐書）他魯撻魯（遼史）（紹介者註、聖宗太平四年二月長春河と改名さる）撻魯古（金史）（紹介者註金代の撻魯古河に就いては津田博士の異說あり。滿鮮地理歷史研究報告第二所收達盧古考、同氏、遼代長春州、東洋學報七卷參照）托吾兒（紹介者註塔兀兒）（元史）洮兒（明一統志）洮兒・拖羅（清一統志）等と同一水にして、今の淘爾河を指稱したものと考へられるを以て、淘爾河（恐らく洮南附近？）と和龍（朝陽）とを聯ねる交通路上に横る廣さ一里の如洛瓌水或は洛孤河はシラムレン老哈河を合する西遼河（即ち東流遼河）に外ならない。當時直接旅行して來た乙力支がより大なるシラムレンや老哈河を捨てゝ、到底一里の幅員を有しうべくもない英金河に就いて言及する筈はないであらうと。

6、舊唐書（卷三）

貞觀二十二年十一月庚子。以奚部置饒樂都督。

この饒樂都督（府）の名は饒樂水に由來することは確かであり、事實、舊唐書（卷一九九下）奚傳には「自營州西北饒樂水。以至其國。云云」と見えてゐる。所が之に先行して記るされた「奚在國京師東北四千餘里。東接契丹。

西至突厥。南拒白狼河。北至霫國。」によつて奚國の位置を考へるに、潢水（Šara murēn）の南に居た契丹の西、潢水の北に住した白霫の南、又白狼河卽ち今の大凌河の北と謂へば、その遊牧地域は大體老哈河以西、シラムレン以南、東南は大凌河畔に及んでゐたことゝなり、之は直ちに先の「自營州西北饒樂水。以至其國。」と抵觸するやうであるが、然しこの文言は彼等遊牧民たる奚民族の遷移性を考慮に置く時は、さまで嚴密に解するを要しない。況んや彼等は時として、潢河北方の山中に逃げ込むことのあつたことは、新唐書（卷一三三）張守珪傳に見える烏知義の叛奚討伐の記事よりしても窺はれるに於ておや。してみると、こゝに謂ふ饒樂水は前引　Aの如洛瓌水が東流遼河を指すに對し、シラムレン（老哈河合流點以西）に適合するやうにも思はれると。

然し師が若し新唐書（卷二一九）奚傳の記載に氣付くならばかゝる苦しい解釋はその必要を見ないであらう。

卽ち、同傳には、

其地東北接契丹。西突厥。南白狼河。北霫。（中略）其國西抵大洛泊（達里湖 Taal nor ?）距回紇牙三千里。多依土護眞水。（中略）盛夏必徙保冷陘山。山直嬀州西北。云云。

とあり、又同書（卷三九）地理志・河北道檀州密雲郡及び薊州漁陽郡の條、兩唐書安祿山傳・遼史（卷三九）地理志等の記載に據つてその本牙は營州（朝陽）の西北老哈河畔なる今の熱河省寧城縣大名城附近にあつたことを知る。されば、唐書列傳の編者宋祁は舊唐書奚傳の「自營州西北饒樂水。以至其國。」の一句を削去し且つ「東接契丹」を「東北接契丹」と改めてゐる。

7、契丹國志、契丹國初興本末。

本其風物。地有二水。曰北乜里沒里。復名陶猥思沒里者。是其一也。其源出自中京西馬盂山。東北流。華言所謂土河是也。曰裊羅箇沒里。復名女古沒里者又其一也。源出饒州西南平地松林。直東流。華言所謂潢河是也。

この裊羅箇或は女古と呼ばれるものは今の Šara murēn にして、それは又西遼河にも用ゐられる。

因みに、裊羅箇の裊は五代史記（卷七二）及び遼史紀事本末には梟とあると。

8、遼史

1、統和二年二月庚子。朝皇太后・太后。因從觀獵

于饒樂川。（卷一〇）

これは遊幸表（卷六八）には

統和二年二月如潢河。

とある。

2、重熙十七年一月（卷二〇）の條及び乾統六年十一月（卷二七）の條參照。（紹介者謂ふ、これは行文上さして必要をみないが故に省略に從ふことした）

3、武安州。（中略）有黃栢嶺・梟羅水・箇沒里水。屬中京。（卷三九、地理志中京道）

3の梟羅は惟ふに梟羅箇ではあるまいか。梟と梟は支那人によつてよく誤られ易い點よりみればありうべきことであると。

更に師は假說して、Niao-louo-ko（梟羅箇）は恐らく支那名の潢河・蒙古名の Šara murën より推す時は、黃色と譯しうる——黃の意を有する北狄語であらうと。そして最尾綴の—Ko（箇）或は—Kouei（瓌、卽ち如洛瓌の瓌）は接尾語にして、滿洲語に於ては、—kan —ken —kon（紹介者注、—gan, —gen 亦然り）は šangiyan（白）の šanguyakan（白味がかつた。紹介者注、 sangu yakan とあるは šaugiyakan の誤）の如く diminutive suffix であり、蒙古語でも ran は例へば xara γan（黑味を帶びた）shira γan（淡黃色の）の如く同樣な接尾語である。（紹介者註、—han,—hen —ha—he 亦然り）若し梟羅箇の箇もこの類の diminutive suffix ならばその脫落附加は容易に說明し得ると。

師は尙續けて、上述八種の史料中、この河名を譯寫したと思惟せられるものを次の如く時代順に列記し、

西紀一世紀　饒樂（古音 nziäu-lak.）

西紀三二五年　澆（古音 niäu）

西紀三八七年　弱落（古音 nziak-lâk）或は弱。

西紀三九八年　澆洛（古音 niän-lâk）

西紀四七一年—四七六年如洛瓌古音（nziwo-lâk-kuâi）或は洛瓌（古音 lâk-kuâi）

西紀四七七年　洛孤（古音 lâk-kuo）

西紀六四八年　饒樂（古音 nziäu-lak）

西紀十世紀　梟羅箇（古音 niäu-lâ-kâ）或は女古（古音 niwo-kuo）或は饒樂川

かくして、師は饒樂その他の漢字で呼ばれてゐるものは齊しく Šara murën（西喇木倫）並びに西遼河（東流遼河）であると結論し、前引諸書の記載は何等この比定に

抵觸せず、特に7及び8の1は袅羅箇の潢河（šara murën）であり、饒樂川の潢河、從つて饒樂川・袅羅箇（沒里）は共に潢河なることを明證してゐるものであると謂ふ。

さて、この結論は大體に於て容認さるべきものとしても、然しこれが師の言の如く、しかく諸書の記載を充足妥當せしめてゐるかどうかに就いては幾多の難點を存してゐる。例へば、

イ、前引3に龍城（朝陽）澆洛（饒樂）水間の距離を一日行程とされてゐるのは如何。（北魏書勿吉傳には朝陽・如洛瓌水間の距離を二百餘里に加ふに二十日行程と謂ひ（4A參照）唐書には潢水を朝陽の北四百里にありと書す。

ロ、6に於て引用された舊唐書（卷一九九下）奚傳の「自營州西北饒樂水。以至其國」を若し師の如く活かすとすれば唐代奚王の本牙がシラムレン（潢水）でなく營州（朝陽）の西北、老哈河畔（今の熱河省寧城縣大名城附近）に嚴存した事との矛盾抵觸を如何に說明すべきか。

ハ、饒樂——弱落——如洛瓌——袅羅箇、四者の間並びにこの一聯の河名と Šara murën との間に存する言語・音聲上の類似性を今少しく突込んで明確に說きえられないであらうか。この點に關して、師が白鳥博士を始め、我が學者の研究諸論文（東胡民族考（前述）・室韋考（前述）・藤田豐八博士「蠕蠕の國號及び可汗號につきて」等の如きを見逃してゐることは大いなる失檢と謂ふべきである。

猶、師は本論文の二一四頁以下に於て老哈河に關して一の臆說を提起してゐる。

卽ち老哈河の蒙古名 Loxa murëu の Loxa を前蒙古時代の遺名と信じ、之を前引4Bに見える洛孤河に對應せしめんとして4のAB兩記載は同じく勿吉國より和龍（朝陽）に至る道程を示すにしても少しく道を異にして、前者は今の開魯附近に於て西遼河を渡り、後者は猶、老哈の名を有する邊りの流を渡涉したものと解し、事實現在シラムレンと老哈河の合流點附近に於ける河流は老哈の名を以て呼ばれてゐることを近年その附近を旅行した M. John Hedley の Tramps in dark Mongolia (London, 1910) の一節を以て證し、從つてAに見える如洛瓌水と、Bの洛孤河とは同一水名にあらずして、如洛瓌水はシラムレン、洛孤河は老哈河を指稱したものであらうと。そ

の爲、師は又、託紇臣水(隋書)土護眞水(唐書)土河(遼史)等の名はこの河の上流に、洛孤或は洛瓌(唐書卷四三下に見える奚部の奉誠都督府五領州の一)はその下流に用ゐられたものと見做し、且つ同一河水が、かく上下によつて異稱を有する例として英金河(錫爾哈河と英金河)を擧げて傍證してゐる。

然し、この臆說の到底成立しえないことは、その根底を爲す老哈(Loxa)の名が何時頃より現はれたかを究めずして、いきなり之が前蒙古時代の遺名なりと盲信したことにある。蓋し吾人の知る限りに於ては、老哈の名に先行するものは土河(契丹國志、遼史・金史)塗河(金史、元一統志)

紹介者註、その原名は隋書を初見とする託紇臣水。通典の迴紇臨水。唐書の土護眞水。吐護眞水。契丹國志の陶猥思沒里であり、猶、白鳥博士は東胡民族考に於て、魏志鮮卑傳の烏侯秦水も同名の異譯ならんと想像されてゐる。

にして、若し讀史方輿紀要(卷一八)に、

土河譯名曰老花母林。元人稱河母林也。或曰老河卽土河之別名矣。

と謂ひ、熱河志(卷七〇)に、

按。老河之爲土河。至今兩名互稱。云云。

とあるに信を置きうるとすれば、老花・老哈の名は、或は元代頃に創まるものではあるまいか。そして更に假說を容るされるならば、老哈(老花)は讀史方輿紀要・熱河志の謂ふ如く老河にして、老は土(河)の轉化と見られないか、元來l、t(d)二音の融通は音韻上に於ては決して珍しからざることであれば、土河が老河と訛し、この老河に更に蒙古語 muren が附加されて——かゝる類例は塞外にあつては限りなく存する——老花母林(讀史方輿紀要)或は老哈穆楞(熱河志)となるに至つたものとは考へられないであらうか。そはとも角、土河と洛孤の連繫を說明することなしに、直ちに洛孤・老哈(Loxa)を同一視せんとする師の考へは斥くべきであらう。

(秋貞實造)